



## 『ユーカラおとめ』

泉ゆたか 著

講談社 刊

定価 1,925円 (本体1,750円+税)

アイヌ文化をよく知らない人でも、詩や文学のファンであれば「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」のフレーズとともに、その流麗なユーカラ（アイヌの叙事詩）を収録した古典詩集「アイヌ神謡集」を編んだ薄命のアイヌ人女性、知里幸恵の名前は耳にしたことがあるだろう。

本書は19歳の若さで死去した幸恵の最後の4か月を描いた大正時代の物語だ。言語学者の金田一京助は、滅びゆく口承のアイヌ語にローマ字でルビを振り、意味を日本語に翻訳して後世に残すという焦眉の課題を持つ。その金田一に言語の才能を見出された幸恵は北海道から上京し、胸の持病を押してユーカラの翻訳と編纂に命を燃やす。金田一らが無意識に持つ先住民差別や社会における男女格差に悩む幸恵は、慟哭の中で己の天命を知り、女性が本能として持つ母性も認識する。多様性尊重の

現代でも社会周縁でいわれのない差別に苦しむ人がいて、女性は子どもを犠牲にする罪悪感を抱えたまま社会的自立にもがいているのだから、異なる民族同士は本当にわかり合えるのか、女性はいつか性役割から解放されるのか、といった重層的な本書の問い掛けは重い。

アイヌ民族の口承叙事詩を金田一は民間文学の枠組みにはめ込んだ。そして今のアイヌ民族は日本の先住民として多文化共生のシンボルとなっている。それらは資本主義社会が一方向的に創出したイメージにすぎないことを本書は静かに伝える。そして、人間も自然も徹底的に利用する資本主義とは対照的に、人間が自然との間に関係を結び、その関係上での秩序と調和を保つのがアイヌ民族の文明なのだと感じ入る。

清廉な魂を持つ天才詩人幸恵の魅力には心が引き寄せられる。本書の目的は、天命を必死に生き抜いた一人の女性の姿を浮き彫りにすることで、私たちに人生の意義と思いの永続性を見出させることなのだと思うのではない。（日本農業新聞 齋藤 花<sup>さいとう はな</sup>）